

無料

ご自由に持ち下さい。

人生を楽しむ寄り道あれこれ

楽園

VOL.86 / 2024.12.1

R A K U E N

アマン

ニュー
カジノ

contents

2024年師走 年末のごあいさつ	4
巻頭コラム じゃんご酔い ③7	
三木寛治	6
昭和モノ語り ④4	
雨にぬれても	7
畑中康博の 古文書パラダイス ⑥0	
畑中康博	8
養生のヒント ⑥6	
「外陰部のかゆみ」	
秋田県医師会 秋田市医師会	
伊藤香里	9
古楽夢 ⑥5 —ちゃんとワケあり民俗学—	
齊藤壽胤	10
那珂静男の 断片的日乗 ⑥8	
那珂静男	12
寿限無のひとりごと ⑥8	
佐々木隆一	13
イラストとエッセイ	
気分草快 ⑥6	
小野田セツ子	14
知られざる秋田の逸話 ⑥8	
星 則幸	15
薬膳万葉(ハンサイ)！ ⑤3	
渡部恵美	16
醗酵ワンダーランドをゆく！ ⑥6	
今野 宏	17
鳥海山物語 ⑥6	
荘司昭夫	18
遠い異国の旅漂 ⑥3	
村岡信明	20
あの日、あのとき ④2	
工藤 茂	21

知られざる秋田の逸話

【第18回】 星 則幸

秋田ゆかりの ブルーバックス復刊!



本欄第9回で紹介した立花希一秋田大学名誉教授の、講談社ブルーバックス翻訳本『科学の父が子に語る科学の話』

大発見はなぜ生まれたのか」(ヨゼフ・アガシ著)が『父が子に語る科学の話』親子の対話から生まれた感動の科学入門」と改題され、7月20日復刊された。この話題については、さきがけ新聞(9月1日付)でも報道されたのでご存知の方も多いと思う。

当書は、テルアビブ大学教授だった科学哲学者ヨゼフ・アガシ(1927-2023)が8歳の息子アロンと科学史にまつわる対話を重ねる形式で、科学の歴史を描き出した科学・哲学入門書である。訳者の立花教授は院生時代に留学先のテルアビブ大でアガシに師事し、2000年にアガシが立花教授を頼って来日した際にこの本を翻訳することを勧められ出版に至ったが、第3版後、長らく品切れ状態にあった。

本欄でそうした経緯を書いた直後から当書を所望する声が数多く聴こえたため、記事が掲載されている『楽園』を添えて、講談社ブルー

バックス編集部長あてに再刊を熱望する旨の書簡を送ったのは昨年12月26日のことである。

そして今年3月18日に講談社ブルーバックス編集部部長あてに再刊を熱望する旨の書簡を送ったのは昨年12月26日のことである。そして今年3月18日に講談社ブルーバックス編集部部長あてに再刊を熱望する旨の書簡を送ったのは昨年12月26日のことである。そして今年3月18日に講談社ブルーバックス編集部部長あてに再刊を熱望する旨の書簡を送ったのは昨年12月26日のことである。

特筆すべきは「博覧強記の読書家」と称されるカリスマ読書家の読書猿氏が、この本の序文を書いたことである。同氏は、2008年からブログ「読書猿」を開始し、数々の埋もれた名著の復刊に関わってきた人物である。

その序文を引用すると、「8歳のアロンの素朴な疑問は、そのまま読者自身の疑問となり、アガシとの対話による丁寧な議論を通して、科学に対するより深い理解へと導かれる。まるで、読者自身がアガシとアロンとの対話に参加しているかのような、臨場感あふれる体験を通して、科学の世界に深く足を踏み入れることができるだろう。(中略) 科学と言う広大な海への、魅力的な招待状だ。アガシとアロンの対話に耳を傾けながら、私たちもまた、彼らと共に、知的冒険の旅に出かけようではないか。そこにはきっと、教科書からは決して学ぶこともできない、科学の真の姿を垣間見ることができよう。」

との最大級の賛辞が記載されている。

売れ行きが好調でたちまち重版出来となり、復刊から2ヵ月に満たない9月3日に第2版の増刷となった。

秋田駅前フォンテAKITAにある宮脇書店では「新書売上第一位」の表示とともに平積みにされていて、店員さんにうかがうと「秋田大学学生さんなど若い方のみならず年配の方も買われていく」と話されていた。

また、秋田駅前オーパのジュンク堂書店では、「翻訳は秋田大学名誉教授立花先生 秋田の民必读です★」の掲示があり、一棚いっぱい当書が並んでいた。

本誌読者の皆さんにも是非手に取って読んでいただき、「知的冒険の旅」に出かけていただけたら、復刊に少しだけ関わった者として最高に嬉しい。

星 則幸(ほし・のりゆき)

1960年生まれ、福島県原町市(現南相馬市)出身。武蔵大学経済学部経営学科卒、日本政策金融公庫で秋田支店長、南関東地区債権業務室長などを歴任し、退職後に秋田市内で新事業立上げ。日本将棋連盟公認将棋指導員。最新刊「タロット東洋起源説探究」(2023年12月15日発行)。

